

### (5) 佐世保市浅子地先における“春藻場”造成 (2013~2015年)

キーワード：春藻場造成、ウニ駆除、母藻設置、魚対策（刺し網、食害防護網）

【背景】佐世保市浅子地先は、クロメや多種のホンダワラ類が繁茂するクロメ場やガラモ場（四季藻場）が形成されていましたが、1989年（平成元年）頃から藻場の衰退・消失が進み、魚の食害およびガンガゼ類や痩せウニ（ムラサキウニ）の増加により磯焼けが拡大し、ウニの漁獲量が減少しています。そこで、2013年9月に“藻場の保護区”を設けるなど磯焼け対策が始まり、2017年には採介藻漁業者を中心に“藻場見守り隊”を結成し、水産多面的機能発揮対策事業を利用した磯焼け対策が継続して行われています（第35回「全国豊かな海づくり大会」水産庁長官賞受賞、平成27年度「ながさき水産業大賞（長崎県知事賞）」受賞）。ここでは、2013~2015年に取り組みされた“春藻場造成”<sup>1)</sup>について紹介します。

【方法】ウニフェンスを作成し（図2-27A）、沿岸線から沖に向けて2本のフェンスを設置（瀬切り方式<sup>2)</sup>）して、“藻場の保護区”が設けられました。保護区は、翌年2014年には沿岸線に沿って南と北の両側に、2015年には北側にそれぞれ拡大されました。

保護区では、ウニ駆除、アカモクとヒジキのスポアバックによる母藻設置、刺網による魚駆除等が行われました。また、2015年1月に佐世保市水産センターから提供されたクロメ種系が試験的に移植されました。

ウニ駆除は、浅場では胴長着用や船上からの鉾突きで、水深3m以深では素潜りとスキューバ潜水で行われました。

クロメ種系の移植は、シェルナース（海洋建設株式会社）の筒を5本1組として並列に繋げたものを移植用基質とし、各々の筒上に種糸を結束バンドで固定して行われ、その上に食害防護用の網が覆い被せられました。

【結果】ウニ駆除と母藻設置、刺網による積極的なアイゴの駆除（図2-27B）の効果により、保護区（約4,400㎡）には、アカモク、マメタ



図2-27 浅子地先における藻場回復の取り組み、A: ウニフェンス作成、B: 刺網で漁獲されたアイゴ、C: 回復した藻場 (2017)

ワラ、ヒジキ等のホンダワラ類やワカメが繁茂し、“春藻場”が形成されました(図2-27C)。クロメ種糸は、設置翌年の5月までは順調に成長し、藻長10cm程度になりましたが、その後、網の破損等による魚の食害防護機能の低下により、クロメは全て消失しました。

**【考察】**浅子地先では、高齢者が沖に出漁しなくても収入が得られるヒジキやワカメ等の有用海藻を増やそうと藻場の回復に対する意識が非常に高く、(株)ベントスの南里海児さんや水産土木建設技術センターの安藤亘さん等の“磯焼け対策のサポーター”を招いての技術指導の受講やクロメ種糸の移植用基質を独自に製作するなど、積極的な取り組みと創意工夫が行われ、佐世保市や県北水産業普及指導センターと連携しながら、藻場回復に向けた対策が計画的に実施されています。その結果、ウニ駆除と海藻の種の供給と刺網によるアイゴの駆除効果も加わり、“春藻場”造成の成功に繋がったものと考えられます。

また、クロメは食害防護網なしには増やすことはできませんでしたが、クロメより魚の食害に強いノコギリモクやヨレモク等を増殖対象種として用いるなど、四季藻場造成の可能性を検討することも今後の課題の1つであると考えられます。

今回の結果から、ヒジキやワカメの有用海藻類の増加に加え、“春藻場”の形成によりウニの身入りが改善され、採介藻漁業の振興に繋がることが期待されます。このことで、“藻場見守り隊”活動が益々活発化し、県内で先駆けた“自立した藻場の管理体制”の確立が望まれます。

#### 参考資料

- 1) 今中(2014):初めての藻場保全活動～佐世保市浅子地区活動組織の取り組み～, 水産開発, **117**, 18-23.
- 2) 水産庁(2015):改訂磯焼け対策ガイドライン.